■（２１２）震災５年を前に「仮設住宅にもっといたい」？との声

「もう少し、この仮設住宅にいたい」。岩手県釜石市の仮設住宅談話室で２２日、視察に来た国会議員や同行した市幹部に、集まった住民らが口々に訴えた。「ここの土地も大手製鉄会社の持ち物で、いつまでも借りる訳にはいかないので」と市幹部は理解を求めた。

なぜ、大変なはずの仮設暮らしを続けたいのか。東日本大震災の被災地から遠く離れた地の人は不思議に思うだろう。震災から約５年で、災害公営住宅や高台の集団移転地が相次いで完成してきた。その結果、仮設住宅を退去する人が増える。行政は管理面から、空き室が増える仮設住宅を閉鎖し、仮設住宅の数を減らそうとする。ただ、まだまだ完成しない災害公営住宅や造成地も少なくない。となると、閉鎖されたら完成まで次の仮設住宅に引っ越さなければならない。それを避けたいというのが冒頭の訴えだった。「引っ越しは体力を使うんです。もうみんな高齢で……」と閉鎖時期の延期を何度もお願いした。

その訴えを聞く市幹部もまた被災者で、行政と被災者の立場で時に揺れる。永田町や霞ケ関からはなかなか見えない最前線には簡単に解決できない課題がまだまだ残る。（山）